

深川ギャザリア・ガーデンコートにおける管理業務とイベント会場の彩り

1. はじめに

ビルの谷間に広がるイングリッシュガーデン風の庭園「ガーデンコート」、人と人が行き交う噴水のある広場「センタープラザ」、荒川中流域の生態系をモデルとした自然と触れ合える「ビオガーデン」。これらは約10年前に弊社が創意工夫を凝らし施工を行った場所である。

3,000 m²程のガーデンコートの施工は、利用者の為の安全な通路の確保からはじまり、膨大な量の既存物の撤去という壁があった。メインとなる石材は、モックアップを作成し、発注者・設計者・施工者の全員で確認・決定を行いイメージの共有を図った。仕上げとなる植栽は、設計者の立ち合いのもとエリア毎にテーマを持たせた植栽を施していった。

センタープラザは、オフィスビルと商業施設を繋ぐ役割としての広場である為、買い物客やレストラン利用者の往来が激しい現場であった。また、現場の下が地下駐車場であることから荷重制限があり、小型の重機や人力を駆使した解体、台車で小運搬、軽量コンクリートの選定といった荷重制限との戦いであった。

水辺を中心にしたビオガーデンは、豊かな緑の基盤となる土壌づくりからはじまった。池の防水は天然素材のベントナイトシートを敷設、池底は遺伝子レベルまで考慮し荒川中流域で産出した荒木田を使用、放流する生物も荒川中流域にて採取、細部までこだわりを持った選定を行った。

これらの様々な工夫を凝らした施工により完成した現場は、引き続き弊社が管理業務を行っている。管理業務においても現場の状況を考慮した方法を選定し、憩いの場となるみどりの手入れにあたっている。

今回は、その中でもガーデンコートの管理業務と日々の手入れから受注へと繋がったイベント会場の彩りについてまとめる。



ガーデンコート



センタープラザ



ビオガーデン

2. 管理業務

2-1. 高頻度な手入れ作業

ガーデンコートでは、6時間/回として週3回の日常管理業務を基本として作業にあたっている。これによる効果として、植物の細かい変化に気づくことができる、ガーデンコートのファンになってもらえる、といった利点がある。

高頻度で手入れ作業を行うからこそ、小さな変化に気がつくことができる。例えば害虫による食害や病気の発生、枯れ枝の発見といった初期対応が重要な変化である。様々な変化に気づくことができるからこそ、いつでもお客様を迎える美しいガーデンを維持することができる。また、こうした日々の手入れの内容を一覧にまとめ、次年度の手入れ計画の目安としている。

ガーデンコートの立地上、様々な方がここを訪れ植物に関心のある方や実際に植物を育てている方から、植物の名前や育て方の質問をされることがある。ガーデンコートの管理業務では、作業の手を止めできる限りその質問に丁寧にお答えしている。それは、ガーデンコートを知ってもらい、良い印象が増えれば増える程、評価に繋がると考えているからだ。いつでもガーデンを手入れしている者がいて、いつでも声をかけられる状況があり、いつでも花が迎えてくる。いつしか自分の庭のようにガーデンコートを楽しむようになり、ガーデンコートのファンになった方々は、口コミで評判を広げてくれる。こうした評判は、施主へ届き、弊社の評価へと繋がっていく。

2-2. 花を学ぶ

美しいガーデンには「花」による演出が欠かせない。造園会社である弊社は、花の専門家に依頼し月 1 回の定期巡回を行っている。花の専門家から直に花の流行・最新情報、魅力的な花の演出を学んでいる。

有名な商業施設で花壇管理の実績があり、様々なイベントで花の演出を行っている花の専門家は、多数の花壇植栽の事例や花の最新情報に精通している。ガーデンコート現状から今後の手入れ方法について助言や新しい花の紹介を受け、ガーデンコートがより魅力的になるよう参考としている。

また、花の専門家がイベントで花を使った演出を行っていれば現地へ赴き、時には施工に携わり演出方法を学んでいる。



ハンギングの作り方を学んでいる状況



2-3. 季節の彩り

商業施設にあるガーデンの特性を活かし、ショーウィンドウが季節を先取りした装飾を行っているように、それにリンクした季節の演出を花壇にも取り入れ相乗効果を狙っている。前述で学んだことを活かした季節の彩りに力を入れている。



ウサギをメインとしてイースターの装飾



風鈴の音色で涼を感じられる装飾



ハートを使ったバレンタインの装飾

3. イベント会場の彩り

前述の管理業務にて、細やかな手入れや季節を彩る装飾が評価され、ガーデンコートメイン会場としたイベントの会場装飾の依頼を受けた。

ガーデンコート全体を装飾で彩ることは初の試みであったため、ガーデンコートの特性や問題点の精査から着手した。イベントの開催時期の4～5月の花の開花時期をまとめ見所の見直しを行った。また、ガーデンコートは強い風が吹くことが多い為、強風に耐えられる装飾の設置方法に試行錯誤した。

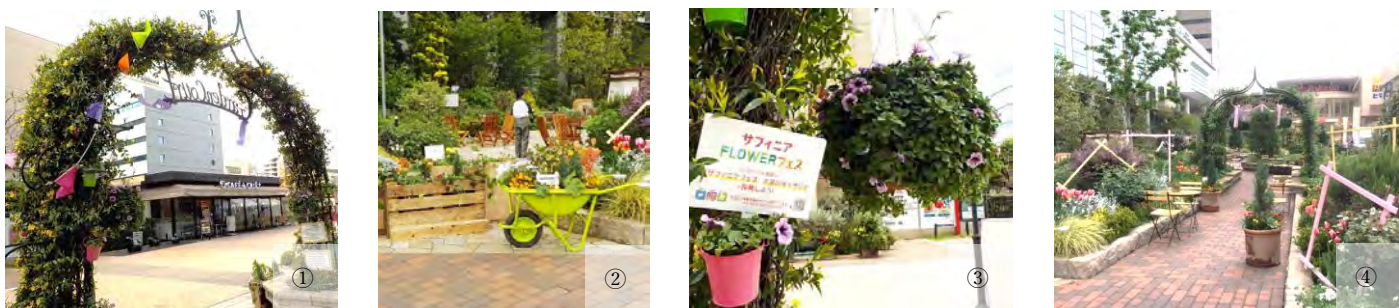
初年度(2017年)は、廃材をリメイクした寄せ植え、企業のプロモーションの一環として花苗提供を受けて作成したハンギングを中心に、ハンドメイドをメインとした装飾となった。また、低予算が課題であったが、ワークショップ等の業務を請け負っている公園指定管理部からの資材や装飾の提供もあり、コストを抑えることができた。

二年目(2018年)のイベント装飾は、前年度よりも全体を一つのテーマに絞りまとまりを持った装飾を提案した。人気の高い、多肉植物を使った寄せ植え、子どもが自由に絵本を楽しめる図書箱「お庭図書館」の設置等、流行とガーデンコート特性を活かした装飾となった。

三年目(2019年)のイベント装飾は、二年目の装飾品を活かしつつも異なる印象になる装飾を目標とした。オーニング(日除け)の内側にハンドメイドのフラワーカーテンで彩り、テーブル装飾のハーバリウムで流行を押さえた。また、開催期間中の手入れ手間を軽減するため、用途別に花苗と造花を使い分けより多くの花で会場を飾った。

2017年は「カラフルな春」をコンセプトとし、様々な色で会場を彩った。

- ①様々な色を使ったガーラントを会場中に設置。
- ②廃材の木製パレットをリメイクした寄せ植え。色を塗り替えた一輪車の寄せ植え。
- ③企業から提供していただいた花苗で作ったハンギング。④ガーデン内の見頃な花をカラフルなフレームで絵画のように仕立てた。



2018年は「春のティーパーティー」をコンセプトとし、ビタミンカラーの黄色をテーマカラーとして会場を彩った。お菓子や料理に使うハーブを寄せ植えに多用、ティーカップ型の鉢を設置し、ティーパーティー会場に仕立てた。

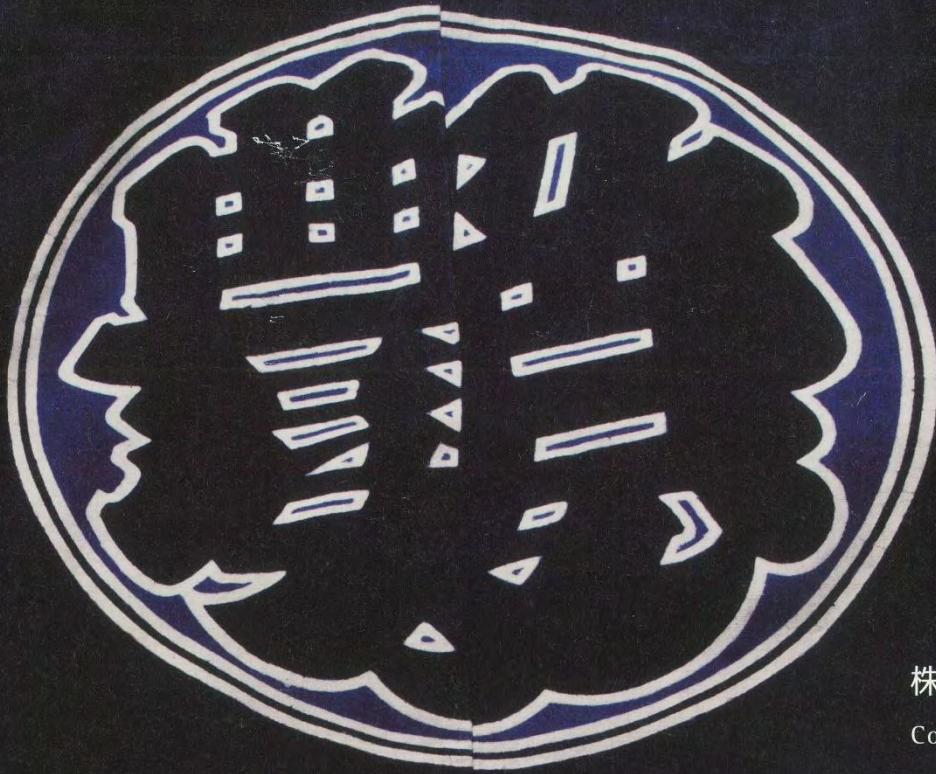
- ⑤黄色の花やハーブで飾ったフォトスポット。
- ⑥日差しの強いガーデンの為、日除けのターフを設置。
- ⑦ティーカップ型の鉢に多肉植物とフェイクスイーツを寄せ植え。
- ⑧子供達が自由に読める図書箱「お庭図書館」を設置。人気の為、現在も設置中。



2019年は「フラワーギフト」をコンセプトとし、華やかなピンクと差し色のブルーをテーマカラーとして会場を彩った。用途別に花苗と造花を使い分けより多くの花で会場を飾った。

- ⑨ハーバリウムを使ったテーブル装飾。
- ⑩手作りのフラワーカーテンで会場に華やかさをプラス。
- ⑪イベントの案内板もフレームの寄せ植えで飾り付け。
- ⑫オペリスクリボンを巻き、門柱の入口風に仕立てた。





株式会社 富士植木
Corporate Profile

富士植木の持つ“みどり”への思いは変わらず、
時代の要望にも応えて170余年。
これからも、新たな“みどり”をつくり続けていきます。

弊社は、明治・大正時代には、東京市民の間で「本所の牡丹園」として有名でした。
明治8年ごろには、牡丹とともに芍薬の栽培にも成功し、その花園を一般に公開しました。これが「本所四ツ目の牡丹園」であり、それを題材として播磨屋一により浮世絵が描かれ、永井荷風により「牡丹の客」という短編小説が書かれています。
当時の時代の要望に応える“みどり”のかたちのひとつが牡丹園だったのであらうと思われますが、その後もそれぞれの時代のニーズに応じて“みどり”をつくり続けてきました。

企業理念

私たちは歴史と伝統に培われた造園技術とその豊富な経験を駆使して
安らぎと潤いのある緑豊かな環境づくりに貢献していきます

シンボルマーク



元の白鷺白が10重の花を10重の葉に添えた「名在十重」のなかで、9重は「陸奥」に用いられました。
明治2年(1849年)創設の弊社では、名称改定した大船造社の号書を、
團扇製家文庫は「陸奥」と名付け、商標として使い続けてまいりました。

伝統とは新しい試みの積み重ねがつくっていくもの。 チャレンジが無ければ伝統は生まれない。

🔪 170年続くのは、始めから新しかったから

富士植木のルーツは170年前の江戸時代に遡ります。芍薬の栽培で名をはせた植木屋文蔵は、「牡丹」を中心とした花のテーマパークをつくり、多くの人に喜ばれました。

文蔵は江戸・明治期に“みどり”のニーズを先取りした、時代の先駆者でもありました。



四ツ目牡丹園満開之図 楊彦延一

🔪 シンプルで美しい、この大仕事を社員みんなの知恵と力で

「シンプルで美しい」これは立曳き工法での移植作業を見ていた外国の方から出た言葉です。

板とココ、そして滑車を使い、人の力のみで大樹を移植する立曳きは、重機の無かった時代には普通に行われていた工法ですが、現在この技術と道具を継承する植木屋は、全国でもごくわずかとなりました。

私たちは、日本ならではの伝統技術を後世に残していくということも、老舗に課せられた大きな使命の一つであると考えています。

時代は変わり、動力も人力から重機に変わりました。短い時間でより効率的な仕事ができるようになったことで、さらに高度な技術が求められるようになりました。しかし、必要とされる仕事の質そのものは昔も今も変わってはいません。美しい都市の風景を創出するために、私たちは社員みんなの技術を持ち寄って様々な難工事に挑んでいます。



「立曳き工法」によるクスノキの移植（有栖川宮記念公園）



「大型クレーン」によるスダジイの移植（新国立競技場）

🔪 伝統と先端技術、この融合が新しいという時代

試行錯誤の先にあるのが新しい技術、ならば引き出しの数が多いほど、おもしろいアイデアが生まれるはず。「知恵の蓄積」という視点で考えると、古い技術を継承していくことにはとても大きな意味があるはず。江戸時代の技術を大切に守りながら、一方で積極的に先端技術を取り入れる。伝統と最先端の融合が、私たちならではのユニークな手法を生み出します。

時には伝統を重んじ、技術者自らが日本らしい風景の一部となることもあります。



欧米発のツリークライミングには木登り専用のギアが使用されます。最近日本でも注目されているツリークライミングと、日本伝統の剪定技術の融合は、都市空間に新しい景色を生み出します。